

## 「人間とは何か」にモデルによって答える

— 現象学的な視点から —

Answering the Question "What is a Human?"

by Means of a Model

— From the Viewpoint of Phenomenology —

砂子 岳彦・福田 鈴子

SUNAKO, Takehiko, FUKUDA, Reiko

## 1. はじめに

人類が直面している分断や貧困などの「世界問題」は人類自らの手によって創り出されている。いずれの問題も人間の「在り方」がその問題の核心にある。総合人間学会趣旨に「汝自らを知れ」と言う古代ギリシャの神殿の託宣は、今日にあっては、総合的な人間学の要請となっている」（総合人間学会）とあるように、自らを知ることは人類にとっての歴史的であると同時に深刻な課題である。この深刻な問いは歴史をへて哲学において考究されてきた。デカルトにはじまる「我」にかんする思惟は、後に実存の態度（在り方）として現象学の問題圏域とされていった。その結果、問いの答えは出たのか、そしてそれはなんだっただろうか。少なくとも問いの答えは自然科学のように共有はされず、先人達が積み上げてきた知見は必ずしも一つの答えとして収斂していない。そればかりか、批判的に先人を乗り越えていく思考作業によって互いの哲学は緊張関係にあり、「世界問題」解決への応用を困難にしている。その背景には哲学の反哲学的運動がある。提示された知見は言語化されるやいなや批判にさらされ、次の新たな知見の踏み台にされていく。しかし、先人達の不断の努力は無駄ではない。そればかりか、積み上げられた知見は自然科学のような共通の概念とはなっていないとしても、その思考の履歴そのものが知の遺産となっている。「世界問題」に直面するからこそ人間とは何かは幾度も問われ、現象学において深められていった思考の履歴は地層となって与えられていると理解することができる。デカルトの方法論的懐疑を徹底させたフッサールの現象学は、超越論的主観性を導いた。その意識へのこだわりを払拭して、ハイデガーは現存在から存在を思索した。さらに、レヴィナスは絶対的な他者への超越にいざなった。哲学の巨人たちの差異を徹底的に明瞭にする哲学的思考を参考にしながらも、これらを一連の共同作業と捉えることは、「還元論的・分断的な個別の研究にとどまって、人間と世界の全体像を見失う今日の問題状況の克服」（ibid.）をし、「新たな人間学の構築」（ibid.）

を目指す総合人間学的な問題設定を可能にする。総合人間学的な視点によって、哲学的な議論を相対化し末節的差異を捨象するならば、先人たちの実存分析の骨組みがモデルとして浮かび上がってくる。

そこで本研究は現象学およびそれに関連する自知の学を築いてきた先人達の思想に個別に立ち入ること無く、むしろ一步引き下がって現象学を俯瞰する視座に立ち、現象学的運動が示唆する人間の「在り方」を構造的に捉えることによって浮かび上がってきた全体知を示す。ここに、人間の「在り方」とは実存に関わる〈わたし〉の姿勢・態度である。〈わたし〉のとする態度は生活のさまざまな選択の鍵をにぎり、他者はその態度に反応する。たとえば、自己実現のために仕事をする人と他者への奉仕として仕事をする人では、人の「在り方」に差異があると言えるだろう。「在り方」は、「考え方」や「行い方」と比べてみると際立つ。「在り方」から「考え方」や「行い方」が導かれるという点において、「在り方」は「考え方」や「行い方」を基礎づけるものがある。

本論の目的は、現象学の系譜から捨象される実存的構造を一つのモデルとして構築することにある。実存的構造は自他の関係性によって成立していることから、共生への道筋が示される。その鍵概念を本論は「内属的共同性」と呼んでいる。内属的共同性とは自己の在り様に還元された他者との自己内共同性である。これまでの共生は、外にいる他者との調和を模索してきたのに対して、現象学が導く実存的構造は内なる他者の受容をもたらす内属的共同性であることが本論の論点となる。この論点への回帰は、より丁寧に検討されなければならないが、実存的構造を一つの全体知として見なすことは許されるだろう。内なる他者の受容によって、調和した「在り方」をもたらす、共生への道筋を明らかにできるのではないかという動機に本研究は支えられている。第2節では現象学の系譜から実存的構造を導き、第3節では実存的構造のモデルを提示し、第4節では実存的構造がもたらす調和的認知の事例を示す。

## 2. 総合人間学の方法論

総合人間学会 2018 年度第二回談話会の報告のなかで、穴見 (2018) は「本学会の目指す「全体知」が私たちの知的活動が目指す「理念」目標であり、それを直接知ることはできず、それ故、個別知（「専門知」）を総合する試みを繰り返しながらそれに迫るとするのが本学会の「知的な活動のあり方」だとする理解がそこに成立しているということであろう」としたうえで、総合人間学会が目指す「全体知」と「総合知」との関係性を「「全体知」とは「総合知」を媒介として構造化される「知の全体」（図全体）であって、その場合、「総合知」とは「個別知」（人文・社会・自然の各「専門知」）を「総合」することで得られる「諸科学（人文・社会・自然）の知の連関の体系」（「関係知としての総合知」）として理解される」とまとめている。したがって、総合人間学の理解は、全体知は個別知を総合して得られるが全体知と個別知は総合知によって媒介される、〈個別知－総合知－全体知〉ということになる（<sup>1</sup>）。全

体知が「構造化される「知の全体」」であることから全体知が構造的であることが示唆されている。

そこで本研究は、「関係知としての総合知」、すなわち総合知を関係を総合する概念とみることによって、〈個別知－総合知－全体知〉を〈個別知－概念－構造〉として、個別の専門知が概念を媒介としてその構造を浮き彫りにすることを試みる。

穴見は、「「個別知」の「総合」と言っても、その方法論は未だ明らかとは言えず、どのような知的活動がそれを可能にするのか、改めて議論する必要がある」(ibid.)と述べているが、総合人間学会第15回研究大会ワークショップ「総合人間学独自の方法論はありえるのか」という問題提起のもとで、方法論は「ある」という立場から穴見は「重要な」条件を3つ提示した。その3つとは、「私」、「暗黙知」、そして「階層性」である。すなわち、自分(私)の視点と、芸術や身体的なアプローチも視野にいれた「言葉によらない知」、そして私を頂点とする存在の階層性の形成がある。

「私」の視点は個別知を与える。その個別知が全体知を支えている。世界と「私」の関係によってより普遍的な知が形成される。一人称視点である「私」に還元してそこから得られる暗黙知を存在の階層性から分析することは、そもそも現象学が遂行してきた態度である。したがって、先人たちの個別知を個別の概念・思想から、それらの共通する概念を媒介として、構造としての全体知を描像することができるだろう。

### 3. 現象学の系譜から見えてくる人間の「在り方」

メルロ＝ポンティ(2018:1)が「現象学とは何か。フッサールの最初の諸著作が世に出てもう半世紀もたつのに、今なおこんな問いをたてねばならないとは、一見、奇妙なことと思われるかもしれない。しかしこの問いはまだまだ解決されてはいない」と『知覚の現象学』序文で述べているように、現象学は体系化された学というよりも、内部へと遡及する態度によって浮上してくるものの一連の成果である。現象学的な態度は、たゆまぬ反省であるがゆえに、成果を構築するそばから既成の概念を(ときに自ら建てた概念すらも)解体する反省によって、体系化を阻んできた。しかし、自己、身体、他者といった視座から遂行する現象学的な運動により導かれる真理は、相反する主張や表現をもっていたとしても視座そのものの位置取りを考えるかぎり、そうした論者達の視点を俯瞰できる現象学的な場所(実存)のうえで論じられている。現象学運動は事象そのものから存在、存在から他者へと、その系譜のなかで思考の視座(足場)を移し、先人の哲学を乗り越えながら分析が積み重ねてきた。ときに批判的に互いの哲学が緊張状態にあったとしても、現象学的な運動が彫塑する構造に目をつけるならば、彼らの思索の地層から実存的構造が浮かび上がってくる。

### 3-1. 現象学からみる人間の捉え方

現象学的運動の萌芽はデカルトに見ることができる。デカルトは「方法的懐疑」によって疑えるものはすべて疑ったとしても、この疑っているということは疑うことができないことから、「我思う、ゆえに我在り」（デカルト 1997）の命題に到達し、哲学の第一原理とした。ここに、諸物に対してそれを確証する「我」（自我）が立つという主観－客観図式が構成される。この図式は後続の研究者にとって、思索の足場を与えた。

フッサールは現象学的還元によってデカルトの自我から意識へと思考の場を移した。現象学的還元とは、わたし自身に引き戻した視点に立って観察する意識内容のことである。すると、フッサールにあっては「私は私の「うちに」他者を経験し、認識し、他者は私のうちで構成される」（フッサール 2001:265）。「私のうちで構成される」他者は私の「変容態」である。自己移入によって他者の現出を突破して志向されるのが他我である。自我とその変容態としての他我は「同一者」でくられる。フッサールは自らを新デカルト主義に位置づけながら、その「我」（デカルト）がいかにしてデカルト以外の自我にも言えるのかが生涯の課題となった。その答えとしてフッサールは間主観性を導いた。これによって、他人の自我が他者の現れを介する自我の転移・移入によって成立する、間主観的領野〈自我－他我〉が見出された。

フッサールの現象学を継承しながら、意識から「現存在」（ハイデガー 1960）に思考の場所を移したハイデガーは、デカルトの「我思う、ゆえに我在り」に対して、「我思う」の論究はなされていても、「我在り」についての無自覚さを批判する。現存在は、他者への気遣いによって他者と共にある存在である、という意味で共存在とも呼ばれる。一般的な意識を論じるのではなく、今ここに存在している一人称視座にたった様子（実存）を徹底させたのが現存在である。現存在に在っては、そこに立つと位置している場所は靴に隠れて見えなくなるように、対象化できない。すなわち、現存在は無人称である。かくして、〈わたし〉は、デカルト、フッサール、ハイデガーの論究を経て、自我、意識、現存在として（対象化されない方向に）純化されていった。ここでは現存在を、人称的自我と区別して、自己と呼ぼう。

ハイデガーによれば、「我在り」は（現存在の）存在であるが、レヴィナスは他者との関係性において「我在り」を基礎づける。その関係性とは「分離」である。他者からの分離によって「私が私であること」が際立つ。分離を成り立たせる経験は「享受」（*jouissance*）と呼ばれる（レヴィナス 1989:130）。享受は二つの階層からなる。第一は身体と世界が触れる階層である。そこでは身体を通して受ける様々な知覚としての「糧」の享受が経験される。第二は、第一の階層を意識する自己関係性の経験である。この二段階の享受によって「他なるもの」（*autre*）と「分離」される「私」（*je*）として「私が私であること」を知る。したがって、ハイデガーが現存在として「私が私であること」を基礎づける代わりに、レヴィナスは分離または享受によってそれを基礎づけたのである。

・・・において生きる」「享受」は、他者の影響を受けて、自己関係性により新たな自己を創り出す認知であるともいえる。ここに指摘したいのは自他の関係が享受されていること、すなわち内属的共同性でとらえられることである。この場合の自他の関係とは〈自我－他我〉であり、その自他の関係は享受によって対象化されて内に視られる。ここまでの議論はフッサールの間主観性〈自我－他我〉の延長上にある。〈自我－他我〉を内に視られるのは、間主観性に基づくからである。レヴィナスは〈自我－他我〉の住まう場を「家」(Maison) (レヴィナス 1989:187,217) と呼ぶ。

現象学前夜のデカルトから辿ってきた以上の系譜を整理すると次のようになる。デカルトの方法的懐疑によって確証されるのは、懐疑している当の自我の存在であった。自我とは懐疑自体から想定された、人称をもった自分である。フッサールは自己移入した他我との〈あいだ〉に間主観性を認めた。間主観性は、他者の見え姿から他我を想定して生じる様々な次元で語られる自他の関係性である。ハイデガーは人称的な自他の関係の下に体験している無人称の領野を現存在とした。無人称の場ということにおいて共存在はまた、自他の住まうレヴィナスの言うところの「家」に相似する。「家」の中で〈自我－他我〉が「享受」によって成立している。逆に言えば他我は非－我であるが、自我と同じ家の中、つまり他我は自我と同じ領圏(家)のもとにある。こうした無人称の場である「家」を自者と呼ぶことにすると、レヴィナスのいう他者は度量衡の異なる自者の外の者である。絶対的に異他なる他者の存在は表象ではないが、その表象として見え姿が与えられている。他者の見え姿(顔)を他己とすると、意図を要さない受動的関係〈自己－他己〉は〈見る－見られる〉関係を成立させている。

### 3.2. 構造的理解による人間の捉え方

フッサールは『デカルト的省察』で「能動的活動がその総合的な働きを遂行している一方で、それにあらゆる「質料」を提供している受動的綜合が絶えず働いている」(フッサール 2001:143) と述べている。二つの綜合は志向性によって構成されていて、フッサールによれば知覚は受動的志向性、言葉は能動的志向性に属する。知覚による受動的志向性の層の上に言語による能動的志向性の層という2つの層は、それぞれ知覚による感覚的な次元と言語による知的な次元である。したがって、関係〈見る－見られる〉に基づく〈自己－他己〉は感覚的層において受動的に作動し、人称的という意味で言語的關係に基づく〈自我－他我〉は知的層において能動的に作用している。このことはレヴィナスの享受が2段階あることと対応している。

知覚に基づいて表現がなされ、言語によって知覚が促されるということから、感覚的な層と知的な層とのあいだに相互作用が生じる。知覚と言語の關係は相互的である。長滝によれば両者は共働的であり、「言語が知覚的文節を引き継ぐという点では、知覚世界から言語への意味の促しがあるのであり、言語がその知覚世界を再構成するという点では、言語から知

覚世界への影響がある」(長滝 1998)。〈自我－他我〉が葛藤的な関係にあるとき、知覚的には(他者の見え姿として)他己は自者にありながら、知的に他我を排他的にみる認知によって不協和な状態をなしている。〈自我－他我〉が受容されているとき、他を内にみる認知によって、〈自我－他我〉と〈自己－他己〉が協和した様態をなす。福田・砂子(2018)は、自己・他己・自我・他我の四項関係を実存的構造として捉え、実存的構造の上で様々な様態を人間のあり様として描像し、特にその均衡した認知を「自己調和」と呼んでいる。〈自我－他我〉の受容とは、認知される自他の関係が自らのうえにおきた出来事であることとして、その両者を引き受けることであり、他我が無ければ自我も無く、その意味において自己調和は、「・・・で生きる」というレヴィナスの享受に近似する概念である。

ところで、「享受」という言葉は、心理学者ラカンによっては欲望としてとらえられている。たしかに「・・・で生きる」ことは欲望に支えられている。胎児でいるとき、あるいは乳飲み子のとき、子は母を欲望している。母子が分離するに従って、言語による呼びかけが始まる。言語という象徴によって自他が関係するようになると同時に、象徴的な他者対して、想像された相手を重ねる。これが想像された他者、すなわち他我である。発生論的にみると、一つだったものが分離する。それによって味わう欠乏と欲望は、分離された自己や対象の同一性と表裏である。そこにラカンは享受を見出した。レヴィナスの享受との違いをあえて見ようとするならば、ラカンの能動的な欲望に対して、レヴィナスの享受は生への愛としてすでにそれによって生きている受動的な欲望である。

ラカンは自他の関係性を四項関係とし、自分を主体 S と自我 a に分けている。(ラカンは主体を多義的に語るが)ここでは、主体は対象化されない自己であり、自我は想像された自分である。自我の様々な特徴を他者へと投影(フッサールの自己移入に相当)したものが想像された他我 a' である。主体 S に対する他者 A が導入される(図 1)。他者 A は他者の主体であり、他者 A と主体 S の関係は象徴的關係と呼ばれる。往々にして、自他の関係は想像的關係が支配的になっている。これは「ラングージュの壁」と呼ばれる、想像的な関係〈a - a'〉が象徴的な関係〈S - A〉を遮断する事態<sup>(2)</sup>である(ラカン 1998:118)。たとえば、昨日までの印象によって他者と関わる時、目の前にいる現在の他者とのコミュニケーションを阻むことがある。ラカンは、シェーマ L によって、自他のこの「在り方」を構造化して図 1 のように示した。

〈個別知－総合知－全体知〉を〈諸思想－概念－構造〉として分析するうえで、ラカンのシェーマ L は実存的構造を示唆している。ラカンのシェーマ L の主体 S・他者 A・自我 a・他我 a' は他者を外に見ている点でそれじしん(ひとりの)実存的構造ではない。そこで、他者 A をその見え姿である他己に置き換えることによってひとりの実存的構造とすることができる(他我は自分の想像している他者である)。ラカンの主体 S・他者 A・自我 a・他我 a' に対応して、それぞれ自己・他己・自我・他我を配置することによって、新たな構造図(図 2)を得る。ラカンの象徴的關係〈S - A〉を、新たな図式では観相的關係、つまり知覚を介

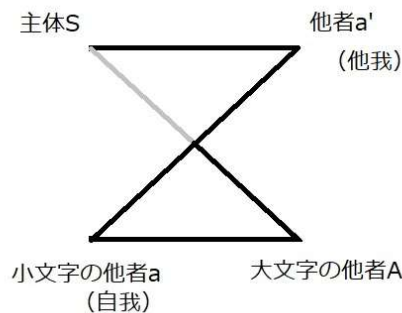


図1: ラカンのシェーマL

(ラカン 1998 『フロイト理論と精神分析技法における自我(下)』より  
著者作成)

した関係〈自己-他己〉に読み替えることによって、図2に自己関係性の場が表現される。〈自我-他我〉が受容されている享受(自己調和)によって、関係〈自己-他己〉と非対立的な(ランガーシュの壁によって阻まれていない)状態を形成することが可能となる。その意味で、図2の位置Oに自己調和(受容された〈自我-他我〉)の極が位置する。それゆえ、シェーマLは象徴的關係が想像的關係によって遮断されている(図1)が、図2では享受によって関係は遮断される必要はない。また、〈他己-他我〉のみならず、ときに人は自ら葛藤を抱えたり自己受容したりする経験をもつことから、〈自己-自我〉の関係もある。したがって、実存的構造(図2)とラカンのシェーマL(図1)が異なる点は、図2のように一人の人間に内属するすべての要素が(シェーマLと異なり)互いに関係し合うことで、自己調和(受容、享受)を可能にする場が与えられていることにある。

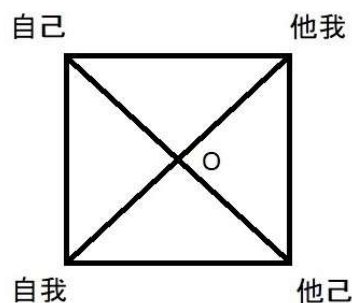


図2: 四項関係(Oは享受)(筆者作成)

レヴィナスが「所有も数的統一性も概念の統一性も私を他者に結びつけはしない。共通の祖国の不在が〈他者〉を一〈異邦人〉たらしめ」（レヴィナス 1989:40）というように、レヴィナスの他者は（ひとりの実存的構造の）四項関係に含まれることはない。図2はレヴィナスの「家」を表したものであるとすると、他者はその外から訪れる。フッサールの他我が自己移入によって関わるができるのに対して、レヴィナスの言う他者は、間主観性の枠組みの彼方にある。他者は他己という窓を通して垣間見られる。絶対的他者に対峙するのは、もはや四項関係における自我ではなく四項関係すべてである自者（家）であり、他者は自者（家）の外にいる。〈自者－他者〉の融合をレヴィナスはエロスによって諭える。エロスにおいては、私は「愛されている」という受動性が相互に働く。「主体はその権能のイニシアチヴからではなく、愛を受け容れることの受動性からその自同性を抜き出すことになる」（レヴィナス 1989:400）。自者が他者から「愛されている」という受動性に基づいて、自らの思量を超えたところに「全面的超越」（レヴィナス 1989:395）がもたらされる。主体は自他の区別がなくなることで自己同一性を失い、同時にその私的な実存を失うさまに、レヴィナスはレヴィ＝ブリュールの「融即」（participation）を引用する（レヴィナス 2005）<sup>(3)</sup>。エロス（融即）をここでは自他融合として説明していく。レヴィナスの「救済」が他者の救済を意味し、主体の救済はエゴイズムとして見られるため、レヴィナス後期では、融合的なエロスを自分だけ救われる「エゴイズム」として否定的に扱う。エロスを通して自我の終焉を果たした後は、エロスによって繁殖が可能となり、「息子」として生まれ変わった自我に至る<sup>(4)</sup>。根無（2011）は、「エゴイズムに陥ることのない主体の救済」というレヴィナスの記述に着目して、救済概念の超越性を自我を突き抜けて無我のエロスに向かう他者との倫理的関係をもつ自我—いわば往相的自我（息子）—を見出している。その意味でフランクルが *Bei-sein* と表現したことと通底するのではないだろうか。しかし、本論はエロスにおける「主体の救済」をさしあたり他者との融合的認知の契機とみて「自他融合」とし、それを超えたところの往相的自我がレヴィナスによって見据えられていることを確認する。自他融合は超越による実存変容の契機である。レヴィナスは現象学に他者を出会わせることによって、自己調和（享受）から自他融合（エロス）、その先の個別でありながら自我中心でない往相的自我（息子）へといざなう。

#### 4. 自他の関係性による実存的構造モデル

福田・砂子は、間主観性から人間の内在的要素を実存的構造を示した（福田・砂子 2018）。それによると、一個の人間を構成する実存的構造は上記の四項関係とその均衡点に位置づけられる相対主義的認知および「自己調和」からなる。このモデルにさらに付け加えるならば、四項関係は見られるものとしての肉体のうえで成立しているため、肉体もまた均衡点として図2の位置0に位置するだろう。それでもまだ、図には自他融合（融即）が表されていないという点において、福田・砂子の実存的構造には改良の余地がある。



自己調和は〈自我－他我〉を受容する認知であるのに対して、自他融合は自者を超越した他者との融合という意味では、同じ調和的認知といえどもその水準が異なっている。鯨岡は初期母子関係の発達を間主観的関係の発達として捉えることの必要を説き、情動から母子の愛着関係の成立を明らかにしている。母子のあいだに「溶け合うような感じ」「しっくりくる感じ」「通底した感じ」が共有されて、愛着関係が成立してくるというものである（鯨岡1988）。この母子の関係は、自分の内なる調和的均衡にある自己調和よりも、さらに自他の共同関係をすすめて「溶け合う」融合状態にある。自己調和（享受）では他を自分の一部と認知しているが、自他融合は実存の外に見出された他者と融合した（意識を超越した）認知極と言える。

自他融合もまた自他の調和的認知という意味では図2における位置0に位置するため、図2において位置0に水準の異なる肉体、自己調和、自他融合の3つの認知が重複している。したがって、図2の実存的構造図を立体的に拡張して正八面体として7つの認知を配位することができる（図3）。この実存的構造モデルは、他我、他己、そして自己調和、自他融合が内蔵されて内属的共同性を示している<sup>(5)</sup>。しかし、レヴィナスの絶対的な他者はこの実存的構造には含まれない。絶対的な他者を図式化するならば、図3の自者の正八面体に他者を表す正八面体をもう一つ結合して描く必要がある<sup>(6)</sup>。

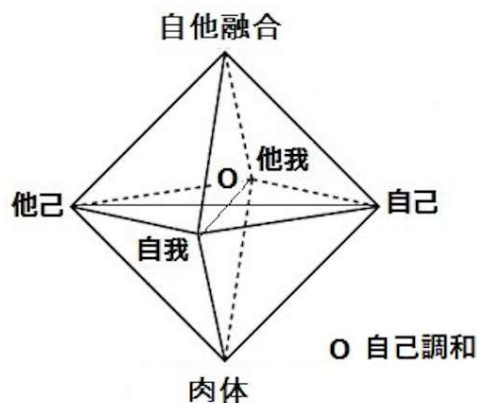


図3: 自者の実存的構造（筆者作成）

媒介する理路〈個別知－総合知－全体知〉を現象学の個々の思想に応用することによって、全体知としての構造が図3のように彫塑された。実存的構造にみられる内属的共同性から、他者との共生の可能性を一人の人間が持っていることがわかる。これによって不条理な状況下で他者を赦したという歴史上の事件は説明できるが、可能であることと必ずしも必然的でないこともまた歴史から学んでいる。共生を可能にした調和的認知の事例を挙げることは認知の意識化にとって意味があるだろう。

## 5. 調和的認知の事例

水俣病問題で被害者の一人として国、県、会社（チッソ）と対立していた緒方正人氏は、『チッソは私であった』（緒方 2020）として、患者団体から離脱し独自の境位に立って運動をしている。水俣病問題と多年に渡って向き合った末に、対立構造を自らの内に見出し、制度としての責任問題の問いから自他の実存的関係性に立ち返った自己調和の事例と考えられる。

インターネットを利用した自己調和の事例として、サイバー空間におけるアバターによる精神障害の癒しが報告されている。社会で強要された自分ではなく、なりたい自分になれるネット上は、自由な自己表現を通じて、次第に自分自身を取り戻す場になっている。「しかも自閉症アバターたちは仮想空間のなかで正確な言葉を操りながら、その驚くべき感覚知覚経験、心的体験、さらに社会において「感じ方」「見方」が少数派であるがゆえの困難な体験を語り合い、共感し合い、支え合っていた」（池上 2017:9）。これは、仮想的な自己受容が現実の自己調和に結びつく例である<sup>(7)</sup>。

自他融合の認知を利用した事例として、フランスの老人介護の現場で創出された「ユマニチュード」と呼ばれるケア技法がある。「ユマニチュード」のエッセンスは「あなたは大切な存在です」というメッセージを届けることである（本田 2016）。他者からもたらされる実存的なメッセージが介護を受ける人達与えられる。介護という応答責任によって実存的な変化が確認できる事例である。

また、地球規模の災害や紛争などによって、地域や民族や国といった枠組みを超えた視点を持つ人達が、少しずつ増えている。彼らは、様々な困難を越えて、言語や風習を越えて、そして国境を越えて、共通する危機に立ち向かっている。自他の境を超えることは、個々の関係でありながら、いったんその認知が開かれれば、それが人類規模に拡張されうる。外務省の広報によると、東日本大震災後約2ヶ月間で、23の国と地域からの緊急援助隊や医療支援チームが被災地を中心に活動してきた内容が報告されている。昨今に見られる災害ボランティア活動などは、自他融合の認知からそうした行動をとると考えられる。総務省統計局によれば2013年は、平成2006年に比べて災害ボランティア活動を行った人は3倍の431万7千人であった<sup>(8)</sup>。人間が個別でありながら、地球市民であることの両立は可能である。なぜ人は人を助けようとするのか、その問いすらその中（ボランティア活動をもたらす「在り方」）にはないのではなかろうか。よって、災害において、人は人のために、あたかも自分のことのように必死になれるのだろう。こうした調和的認知は実存的構造が示す内属的共同性から説明することができる。

## おわりに

総合知を媒介として個別知から全体知を得るという方法論を現象学に適用することによって、次のような暫定的結語を得る。〈個別知－総合知－全体知〉を〈諸思想－概念－構造〉として現象学とその関連する個別の思想を総合することによって、一つの実存的構造を未だ荒削りながら彫塑した。

人間とは何かを追究していくことは難しい議論になり得るが、実存的構造の柱を定義していくことは、これからの「人間とは」という問いを解く助けになるとみている。実存的構造の柱を多角的に応用し、「人間」が課題とされている諸問題の根本が明らかにされていくだろう。実存的構造は、そこから生じる人間の様態を説明するものである。本論が提示する実存的構造モデルは、人間の本質において、他者との調和的認知をすでに有していることを示している。実存的構造が意味するのは、自他を内包する人間は本来倫理的な存在であるということである。内属する調和的認知を認識することによって、よりすみやかな協和的様態の実現が期待できるだろう。

## 注

- (1) この図式は田辺元の類－種－個の図式において、個と類は種によって媒介されるという「種の論理」によって補強されるだろう。田辺は媒介する種が本質的であり、種もまた何かに媒介されるという絶対媒介にまで論を徹底させていく。
- (2) ラカンの象徴的な関係〈S－A〉を本論は言語によって象徴される知覚的対象としてとらえている。すると、想像的な関係〈a－a'〉と象徴的な関係〈S－A〉は知的層と知覚的層に対応する関係に読み替えられる。
- (3) レヴィ＝ブリュールは「融即」（ブリュール 1953）という概念を「未開」社会における集団表象、同一性を超えた原理として規定している。レヴィナスは、普遍的なものから倫理的有責性をもつ個別なものへの立場から、「融即」と距離を置いている。
- (4) 自他融合の後にくる超越をレヴィナスは「息子」と呼んだ（レヴィナス 1989:395）。融合から分離した「息子」として応答責任を持つ者の境位である。福田・砂子（2020）はレヴィナスの他者論と V.E. フランクルの Bei-sein を近似するものとして論じている。
- (5) 認知とその定義を次の表 1 にまとめておく。
- (6) 図 3 の正八面体は一人の（自者の）実存的構造であるので、その中に他我や他己は要素として含まれるが、他者はそこに含まれない。他なるものである他者は自分と同等のものであり、〈自己－他己〉〈自我－他我〉を結節点として他者の正八面体は自分のそれと結合する。
- (7) ネット上のゲームに調和的認知が見られる。対戦型のゲームでは、画面上にアバターと呼ばれる自他の分身が映されている。対戦相手にもそれが映っているが、二つの画面を比べると自他が逆転している。この様子は現実世界における実存的構造を仮想世界に反映しているといえる。リアルな自他は自己と他者で、自我と他我は仮想的な自他として画面上に反映されている。砂子・福田は、対戦型ネットゲームにおいて、たとえ対戦であっても画面上でユーザーによって享受されて（楽しまれて）いるという点で、仮想的な自己調和が実現していることを報告している（砂子・福田:2018）。

表1: 認知とその定義 (福田・砂子 (2018) より一部改変)

用語	定義
自己	自我, 他己, 他我を直接受け, 体験できる場
自我	自己の経験も含め思考, 感情によって創られた有り様
他己	自己に映った他者の姿
他我	他者の経験も含め思考, 感情によって創られた有り様
自我フィールド	〈自我-他我〉の作用によって自我が形成されていく場
自者	自己, 他己, 自我, 他我で構成される
他者	自己, 他己, 自我, 他我で構成される「他なるもの」
自己調和	他者の影響を受けて, 自己と照らし合わせることにより 新たな自己を創り出す調和的認知
自他融合	自他の隔たりが無く, 全ての一体感を得ている認知

(8) <https://www.stat.go.jp/data/topics/topi670.html> 2018年12月最終閲覧

## 参考文献

- 穴見慎一 (2020) 「第3 報告者からの報告「総合知」と「全体知」- 私たち (本学会) は何を知ろうとしているのか? -」『総合人間学研究』第14号、pp.69-81
- 池上英子 (2017) 『ハイパーワールド: 共感しあう自閉症アバターたち』エヌティティ出版
- 緒方正人 (2020) 『チッソは私であった』河出書房新社
- 木村武史 (2018) 「シンポジウム趣意」『総合人間学会第13回研究大会要旨集: 科学技術時代における総合知を考える- 一文系学問不要論に抗して -』
- 鯨岡俊 (1988) 「初期母子関係の発達と愛着の問題」『島根大学教育学部紀要』第22巻第1号、pp.27-43
- 砂子岳彦・福田鈴子 (2018) 「仮想空間における「分身」と自己調和: ラカンのシェーマLとアバター」常葉大学経営学部紀要6(1)
- 総合人間学会趣旨本文  
[http://synthetic-anthropology.org/?page\\_id=2](http://synthetic-anthropology.org/?page_id=2) (2021年9月29日最終閲覧)
- デカルト, R. (1997) 『方法序説』René Descartes 原著・谷川 多佳子訳、岩波文庫
- 長滝祥司 (1998) 「知覚と言語が交わる場所」『メルロ=ポンティ研究』第4号
- 根無一行 (2011) 「レヴィナスにおけるエロスと子を生むこと (父性) をめぐると一試論- 救済の問いに向けて」『宗教学研究紀要』京都大学文学研究科宗教学専修 vol.8
- ハイデガー, M. (1960) 『存在と時間 上』桑本努訳、岩波文庫
- 福田鈴子・砂子岳彦 (2018) 「共生社会へ向けた人間構造の仕組みとその在り方: 自己と他者の関係に焦点をあてて」共生社会システム研究12(1)
- フッサール, E. (2001) 『デカルト的省察』浜渦辰二 (訳)、岩波書店

福田鈴子・砂子岳彦 (2020) 「V.E. フランクルの実存を構成する自己と他者：現象学の視点から解く人間構造と共生」総合人間学研究 14

ブリュール, リュシアン・レヴィ (1953) 『未開社会の思惟 上下巻』山田吉彦訳、岩波書店

本田 美和子 (2016) 「優しさを伝えるケア技術：ユマニチュード」『心身医学』第 56 巻第 7 号、pp.692-697

メルロ＝ポンティ, M. (2018) 『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局

ラカン, J. (1998) 『フロイト理論と精神分析技法における自我 (下)』J-A・ミレー編・小出浩之他訳、岩波書店

レヴィナス, エマニュエル (1989) 『全体性と無限—外部性についての試論』合田正人 訳、ポリロゴス叢書

レヴィナス, エマニュエル (2005) 『実存から実存者へ』西谷修訳、ちくま学芸文庫

[すなこ たけひこ／常葉大学／科学基礎論・共生社会システム]

[ふくだ れいこ／常葉大学／異文化コミュニケーション・多文化共生]